

スコット・ショウ

中村ひろ子、翻訳

Copyright 2007 by Scott Shaw – all rights reserved

イギリスのオルガンは、ヨーロッパ近隣諸国との共通点がある時期とない時期の両方を経てきた。本稿第1部では、ルネサンス時代のイギリス・オルガンはヨーロッパ大陸のそれと非常に類似していることを見た。しかし、イギリス宗教改革によってオルガンが破壊された後、1660年の王政復古以降は他に類のない様式のオルガンが発達するようになった。その詳細については本稿第1部を参照されたい（立教大学教会音楽研究所ニューズレター、No.14、2006年イースター号）。このタイプの楽器は、その後19世紀初期に至るまで変わることなく標準的な教会オルガンだった。本稿ではまず、それが消滅するまでの経過を論ずる。150年近くにわたって不変の仕様で造られてきた真正イギリス・オルガンが、なぜ19世紀の初期になって、まったく違うタイプの楽器に急速に取って代わられたのか。この変革の時期から、19世紀のイギリス・オルガンについて考察していく。

19世紀初頭の大英帝国における様々な歴史の転換は、大規模な社会の変化をもたらした。産業革命の詳細については本稿の及ぶところではないが、それによって生じた社会的事象には、オルガン建造業に直接的な影響を与えたものも多い。第一に、工業の勃興は、何よりもまず大幅な人口増加という重大な社会変化をもたらした。それにとまって、農村から都市部へと人口が流入する。都市部の人口が増えれば新しい教会が必要となり、ひいてはオルガン建造業者の新たな市場が生まれることとなった。

この時代のオルガン建造に生じた変化の第2の要因は、ヨハン・セバスティアン・バッハのオルガン作品の受容が進んだことである。作曲家本人の存命中（1685-1750）はイギリスではほとんど知られていなかったバッハの作品を、サミュエル・ウェズリー（1766-1837）らが熱心に紹介した。18世紀末から19世紀初頭にかけてのイギリスには、完全な足鍵盤や独立したペダル・パイプをもつオルガンは事実上存在しなかったから、ウェズリーらのオルガニストたちは、バッハの大きなオルガン作品を連弾用書き換える（すべて手で演奏される）という手段に頼っていた。イギリスの聴衆は、これほどのオルガン曲が本来は一人の演奏者で、しかも手だけでなく足も使って（当時のイギリスでは知られていなかったこと）演奏されていると知って驚嘆した。この新発見に押されて、バッハの作品を書かれたとおりに演奏できるオルガンを求める動向が高まる。さらなる一押しになったのは、フレリックス・メンデルスゾーンのイギリス演奏旅行だった。そこではしばしばバッハの作品が演奏されたのである。

19世紀初期におけるオルガン建造様式の変化の第3の要因として、この時代になるとイギリス人の暮らし向きが豊かになってヨーロッパ旅行も容易になり、現地のオルガンをじ

かに聴くことができるようになったことが挙げられる。もちろん、誰もが聴いたものを気に入ったわけではない。音楽史家のチャールズ・バーニー（1726-1815）は大陸をあちこち旅して、そこで聴いたオルガンについて論評している。バーニーはヨーロッパのオルガンがよりパワフルであることは認めたが、イギリスの音色の方がよいと考えた。彼はこう述べている。「我が国のオルガンは、タッチや音色だけがよいだけでなく、模倣ストップも私が聴いたどんなオルガンよりずっと優れている」。¹ 音色がやわらかく比較的音量の小さいイギリス・オルガンを良しとするこうした傾向は、国産の楽器はヨーロッパのオルガンと比べると音量にも低音にも欠けるという認識に次第に押されていく。

イギリスのオルガン界における重大な変化にはこれ以外の要因もあるが、ここに挙げた3つの要因は、大きな変化が求められ、また変化を実現する機会があったことを示している。これまでにない繁栄と人口増が、オルガンビルダーには売る機会を、教会には新しいオルガンを買う機会を与えた。バッハのオルガン音楽の受容によって、既存のオルガンとは異なるタイプのオルガンが求められるようになった。そして、同時代のヨーロッパのオルガンのパワーと深みを知ると、次第に国産オルガンが物足りなく感じられるようになった。国産オルガンは、一世紀半以上にわたって（1660年から1820年代まで）結構なオルガンとされてきたのだが。

新しいタイプのオルガンの誕生に触れる前に、比較のポイントを明確にするために18世紀末の典型的なオルガンについて簡単に振り返っておこう。このオルガンがイギリス独自のものとされる要件は、以下のとおりである。

1. 音域の広いグレートおよびクワイヤ・ディヴィジョンの鍵盤（これらの鍵盤の最低音は通常G₂、つまり今日の標準的なオルガンより4度低い）。
2. 音域の狭いスウェル・ディヴィジョンの鍵盤（この鍵盤の最低音は多くの場合c₁、あるいは真ん中のc）。パイプはスウェルボックスに収められ、足ペダルで操作するシャッターがついている。この鍵盤は主として右手のソロ・パッセージに用いる。
3. 足鍵盤 足鍵盤がある場合も（まったくない場合も多かった）完全な鍵盤ではなく、単にグレート鍵盤からのプル・ダウンである（詳細については本稿第1部参照）。足鍵盤独自のパイプはない。
4. 典型的なストップ・リストについては、本稿第1部を参照されたい。注目すべきこととして、グレートの8フィートのダイアペイソンが2列ある例がたまに見受けられるのを別として、パイプの列が2倍にされた例はない。

オルガン改革－「島国の運動」1820-1840

オルガンを消滅に追いやった18世紀における社会的変化は、以上のとおりである。では、19世紀にそれにとって代わったオルガンはどのようなタイプなのだろうか。もちろん、1800年のイギリス・オルガンが一夜にして消滅したわけではない。設計に欠陥があると考えられたことを乗り越えるべく、段階的に変更が加えられていった。それ以前の様式から離れ

る第一歩は、ニコラス・シスルスウェイトの19世紀イギリス・オルガンに関する著作の中で「島国の運動」と名付けられている。² こうした動きは1820年から30年にかけて興り、新しいオルガンの音色を作り出そう、ただし伝統的なイギリスの音域の広い鍵盤は残そうとするものだった。最終的に目指すのは、オルガンのパワーを増強し、ペダルの欠損を改めること。同音・同音高のパイプを何列か足せばオルガンの音量が増すという考えだ。パイプの列を倍に増やす風潮の著しい例が、1834年にヨーク大聖堂に建造されたエリオット&ヒル・オルガンだ。この楽器には手鍵盤が3段とペダルがあり、大聖堂の身廊と聖歌隊席を隔てる聖歌隊仕切り障壁（クワイヤ・スクリーン）の上に設置されていた。おそらく分厚いケースの東西どちらの面にもよく響くように考えて設計されたのだろう、2列で構成されたパイプが極めて多い。たとえば2列のオープン・ダイアペイソン8フィートが両面に設置され、都合、同じ音が合わせて4列ある。高いピッチのパイプも同様に2列で構成されている。1台のオルガンに同じパイプが最大4列あることがわかる。このような方式より、同じ音高で音色が違うパイプを重ねた方が、音色ははるかに多彩になる。19世紀のヨーロッパにおいては、異なる種類の8フィート・ストップを2列構成にするのは一般的だったが、ただ単に2列にする、特に高いピッチのパイプを重ねることはまずなかった。予算と材料の大きな無駄であるのみならず、この慣行はオルガンの音量を増すという目的をまったく達成しなかった。特定の音色を重ねる（たとえば1本でなく2本）と、ある程度は音量が増す。さらに幾分は豊かな音色になる。しかし、こうした方法を追い求めても、音量の大きなオルガンを実現するのはむずかしい。

奇妙な2列構成のパイプだけでなく、鍵盤の音域も独特だった。グレート・ディヴィジョンの音域は、今日の楽器よりはるかに広がった。最低音はC C、あるいは現代の楽器より1オクターブ低かった。最高音はc 4で、鍵盤の音域は6オクターブになる。対照的に、足鍵盤はグレートより1オクターブ高いCから始まる。このオルガンは、ほとんど演奏不可能だったと言われている。あまりにタッチが重かったのだ。そして、足鍵盤とグレートどちらを低音部に用いるかについて明らかに混乱があるところを見ると、新しい見込みのあるオルガンを作り出そうというイギリスのオルガン建造家たちの試みは、ようやく緒に着いたばかりであることがわかる。ポーリンジャーは、このヨークのオルガンについてこう述べている。「当時のイギリスで最大の楽器であり、おそらく史上最悪の失敗作である。16年後には完全に改造されてまったく違う楽器となったが、多少よくなったにすぎない」³。

オルガン改造と「ドイツ・システム」1840-1860

手鍵盤のいろいろな配置や2列構成のパイプなどを試みた年月の後、イギリスの建造家たちはようやく新しいイギリス・オルガンのための実効ある方策にたどりついた。それは「ドイツ・システム」と呼ばれ、ドイツのオルガンを指針として完全に新しいオルガンを作り出そうというものだった。こうしたタイプのオルガンが初めて現れたのは、1836年のことである。1840年代までには、建造家たちはもっぱらこの様式に切り替えるようになる。

伝統的な音域の広い鍵盤を持つイギリス・オルガンが、一世代で新しいタイプに置き換わったことになる⁴。このタイプの主要な点は、E・J・ホプキンスとE・F・リンボルトによる『オルガン』（London 1855）に詳しい⁵。すなわち、以下のとおりである。

1. すべての手鍵盤は同じ音域を持ち、Cから始まる（現在のオルガンと同じ）
2. それぞれの手鍵盤が独立したコーラスを持つ（ただし通常はグレートとスウェルのみ）
3. 低音部は完全に独立したペダル・ディヴィジョンによってもたらされる。これもCで始まる。このディヴィジョンは16フィートで始まるので、手鍵盤より1オクターブ低く聞こえる。
4. ストップの種類が増やされ、オルガンの音色が多彩になるとともに、ヨーク大聖堂のオルガンのように2列構成にすることは避けられた。
5. イギリス・オルガンで一般的だったミーントーンは平均律に変わった。

この初期の「ドイツ・システム」オルガンのよい例は、1843年にロンドンのケンジントンにあるウィルトン・プレイス聖ポール教会に設置されたグレイ & デイヴィソンである。建造家は「ドイツ・プランによる模範的オルガン」と呼んだ⁶。手鍵盤は今日の標準と同様C-f^{'''}で、16フィートまたは8フィートで始まりミクスチャーに至るコーラスを形成している。独立したペダル・ディヴィジョンも独自のコーラスを持ち、今日の標準と同じ音域を持つ。ソロでもコーラスでも使える多彩なリードの音色がある。まだペダルの演奏に慣れていない人のために、アシスタントが足鍵盤を弾けるよう追加の手鍵盤がついていたのがおもしろい。1860年代になってもまだ、足鍵盤を使わないオルガニストはいたのだ。リッチフィールド大聖堂のオルガニストは1861年のオルガンについて「それ（足鍵盤）を付けるのは結構だが、私は絶対に使わないぞ！」⁷と言っている。2列構成のストップもいくつかはあるが、グレートオープン・ダイアペイソン8フィート2列に限られている。

図1 ウィルトン・プレイス聖ポール教会のグレイ & デイヴィソンオルガン（1843）⁸

<u>Great</u>		<u>Swell</u>	
第2鍵盤、C-f ^{'''} 、54鍵		第3鍵盤、C-f ^{'''} 、54鍵	
Double Diapason bass/treble	16	Double Diapason bass/treble	16
Open Diapason	8	Open Diapason	8
Open Diapason	8	Stopped Diapason	8
Stopped Diapason	8	Principal	4
Principal	4	Flute	4

Twelfth	2 2/3	Fifteenth	2
Fifteenth	2	Sesquialtra	III
Sesquialtra	IV	Mixture	II
Mixture	II	Cornopean	8
Furniture	II	Trumpet	8
Trumpet	8	Hautboy	8
Clarion	4	Clarion	4

Choir

第1鍵盤、C-f'''、54鍵

Stopped Diapason treble/bass	8
Dulciana	8
Keraulophon	8
Clarabella Flute	8
Principal	4
Flute	4
Fifteenth	2
Piccolo	2
Mixture	II
Clarionet	8

Pedal

足鍵盤、C-e'、29鍵

Open Diapason	16
Stopped Diapason	16
Principal	8
Fifteenth	4
Sesquialtra	IV
Trombone	16

1851年の万国博覧会

初期イギリス・オルガンの歴史における最後の、そして完全な転換点は1851年の万国博覧会と位置づけられる。来場者は500万人といわれ、これは当時のグレート・ブリテンの全人口のほぼ3分の1にあたる。ビクネルはこのように述べている「……ブリテンは世界に扉を開き、世界が流れ込んできた」⁹。パイプオルガンは、この盛大な工業の博覧会に華々しい位置を占めた。ボーリンジャーによると、ごく小さなキャビネット・オルガンからヘンリー・ウィリスの70ストップのオルガンまで15台のオルガンが出展された。国内のオルガンも海外のオルガンも展示されている。中でも重要だったのが、ドイツの建造家シュルツェによるオルガンだ。このオルガンによって、イギリス人はそれまで出会ったことのない音色に触れた——プリンシパル系ストップの豊かで強力なコーラスは、同時代の

国内のいかなる建造家をも凌駕していた。まさしくイギリス人が目指してきた音色であり、しかも一つとしてパイプを2列にすることなく実現されていた。評判になったのは力強いプリンシパルのコーラスだけではなく、イギリス人の知らなかった個性的なドイツの音色がたくさん組み込まれていた¹⁰。ドイツのオルガンだから、もちろん手鍵盤の音域は今日見られるものと同様である。この博覧会のおかげで、シュルツェはイギリスの顧客から重要なオルガンの注文を何台か獲得した。

博覧会から数年のうちに、広い音域を持つ古いイギリス・オルガンは事実上消滅した。しかしながら、それがドイツ風の音をもつオルガンに取って代わられたと考えるべきではない。イギリスの建造家たちはドイツの設計はそのまま取り入れたが、ドイツ風の音色をイギリス古来の音色と混ぜ合わせて完全に新しいタイプのオルガンを作り出したのである。そして、シュルツェは影響力の強いオルガンを何台か国内に建造したが、イギリスにおけるオルガン建造はほぼ完全に国内産業として残った。おそらくこの様式における最も代表的な建造家は、ウィリアム・ヒルだろう。ヒルは失敗におわった1834年のヨーク大聖堂のオルガンの建造に加わっていたが、1850年代にはドイツのオルガンについて学んでいた。博覧会後のヒルのオルガンは、ドイツとイギリスのオルガンの伝統の最良の部分を組み合わせた、堅固で音楽的な創造物だった。創業者のウィリアム・ヒルが1870年に没した後も、息子や孫が同じ様式のオルガンを第1次世界大戦まで造り続けた¹¹。ヒル工房の最大の作品は、オーストラリアのシドニー・タウン・ホールのものである。この巨大な楽器は建造時には世界最大で、現在も建造当時の仕様のままだ。録音も手に入るので、博覧会後のイギリス・オルガンの音色がどんなものだったかわかる。

ヴィクトリア朝のオルガン 1860-1900

ビクネルは、ヴィクトリア朝においては「英国はおそらく世界有数のオルガン建造国として台頭した」と述べている。¹² 19世紀ヨーロッパのオルガン史では無視されがちだが、商業的にも芸術的にも全盛期だった。数百人もの職人を雇うオルガン工房も珍しくなく、膨大な数の製品がグレート・ブリテンの津々浦々、そして諸外国へと送り出された。建造されたオルガンは優れたもので¹³、途轍もない大きさの楽器もしばしばあった。古いスタイルのイギリス・オルガンを持つ教会と大聖堂のほとんどすべてが19世紀のうちに楽器を取り替え、オルガン建造家に空前のビジネス・チャンスをもたらした。こうしたブームの恩恵に浴したのは、ヒル&サン、ウィリス、グレイ&デイヴィソン、ハリソン&ハリソン、ウォーカーほか数多い。この中では、ヘンリー・ウィリスがヴィクトリア朝で最高のオルガン建造家として知られた。

ウィリスは弱冠30歳だった1851年、万国博覧会のための70ストップのオルガンを見事に造った。シュルツェのオルガンが国内の建造家の注目の的となる一方で、ウィリスの経歴も博覧会から始まった。経済的な状況は彼のような性格の人物に合っていた——頑固で自信にあふれ、すでに卓越したオルガン建造家だったのだ。ウィリスは、引退までに7つ

の大聖堂と数え切れないほどの教会にオルガンを建造した。彼のオルガンは今でも使用され、イギリスが世界最大の帝国であり世界経済の中心だった時代を垣間見せてくれる、音の窓となっている。私は、ケンブリッジのイマヌエル合同改革教会でウィリス・オルガンを弾いた。1880年に建造された手鍵盤2段の小さな楽器。これは改修され、非常によい状態で演奏できる。

図3 イマヌエル合同改革教会のウィリス・オルガン (1880)

<u>Great</u>		<u>Swell</u>	
Open Diapason	8	Lieblich Bourdon	16
Gamba	8	Open Diapason	8
Claribel Flute	8	Salicional	8
Dulciana	8	Lieblich Gedackt	8
Principal	4	Voix Celeste	8
Harmonic Flute	4	Gemshorn	4
Fifteenth	2	Piccolo	2
Clarionet	8	Mixture	III
Tromba	8	Horn	8
		Oboe	8
<u>Pedal</u>			
Open Diapason	16		
Bourdon	16		
Trombone	16		

同教会のオルガニストが、ウィリス・オルガンの柔軟な特性をとともうまく書き表している。¹⁴

このオルガンには使いやすいところがたくさんあるが、中でも、それぞれのストップを混ぜて使えることが大きい。もっともわかりやすい例は、グレートの8フィート・ストップとほかのストップをいっしょに使う方法だ。どれも単独で十分使える

音だが、合わせるとまた違う色合いが生まれる。グレートオープン・ダイアペイソン 8'は大きな音だ。ガンバ 8'をダイアペイソン 8'に足すと、ダイアペイソン 8'に鋭い切れ味加わる。クラリベル・フルート 8'を足すと、フルートのあたたかい音色がダイアペイソンに柔らかみを加える。ガンバ 8'とクラリベル・フルート 8'を合わせると、グレートプリンシパル 4'とフィフティーンズ 2'（訳注：イギリスのオルガンではプリンシパルの2フィートをこう呼ぶ）を使うとき、ダイアペイソンより軽いベースになる。また、クラリベル・フルート 8'とドゥルツィアナ 8'の組み合わせもうまくいく。各ストップがうまく溶け合うように造られているから、コンビネーションの可能性はまだいくらでもあり、すぐに思いつく組み合わせ以外にも使えるコーラスがたくさんある。

私はこのオルガンを何度か弾き、このオルガンの伴奏で合唱のコンサートを指揮したこともある。決して大きくはない、22 ストップしかない楽器だが、無限の多様性をもつ楽器だ。スウェルのサリシオナルの囁くような弱音からフル・ストップの轟くような響きまで、クレッシェンドも滑らかだ。リード管のソロも、クラリネットやオーボエなどのオーケストラ・タイプから堂々としたトロンバまで何種類もあり、会衆全員で歌う聖歌も十分にリードできる。ペダル・ディヴィジョンには3つの16 フィート・ストップがあり、オルガン全体を力強く支えてくれる。その柔軟性ゆえに、いろいろな時代の作品を演奏することができる。鍵盤のタッチは軽く、反応が良い。総じて、このオルガンは教会には理想的な楽器であることがわかった。

結論

イギリスのオルガン建造の伝統は、20 世紀に入って新たな難題にぶつかる。第1次世界大戦、大恐慌、バロック様式のオルガンの復興など、すべてが業界の弔鐘となった。しかし現在も、伝統的なイギリス様式のオルガンを建造している建造家は数多い。いくつか挙げるなら、ダラムのハリソン&ハリソン、ロンドンのウォーカーとマンダー、ウスターシャーのニコルソンなど。現代のイギリス・オルガンの基礎は、依然としてほとんどヴィクトリア朝にある。

そして、イギリスのオルガン建造の伝統は日本にどのような影響を与えただろうか？ 残念ながら、日本にはイギリス・オルガンはごく少数しかない。コンサートホールはともかく（コンサートホール・オルガンを発明したのはイギリス人である）、ヴィクトリア朝のオルガンのあたたかい音色は残響の短い日本の教会によく合うと思う。豊かな8フィートの音色がたっぷりした低音に支えられて会堂を満たす。音量を最大にしても音色は洗練されており、耳をつんざく高音にはならない。イギリス・オルガンはバッハの音楽も十分に演奏できるのだから、「バロック・オルガン」を買いたいという自然な衝動を再考してもよいのではないだろうか。

-
- ¹ Stephen Bicknell, *The History of the English Organ* (Cambridge: Cambridge University Press, 1996), p.213.
- ² Nicholas Thistlewhaite, *The Making of the Victorian Organ* (Cambridge: Cambridge University Press, 1990)
- ³ James Boeringer, *Organa Britannica* (Lewisburg: Bucknell University, 1989), vol 3, p. 356.
- ⁴ Thistlewhaite, p.181.
- ⁵ Bicknell p. 235
- ⁶ *Ibid.*, p. 239
- ⁷ *Ibid.*, p. 250
- ⁸ *Ibid.*, p. 240
- ⁹ *Ibid.*, p. 241
- ¹⁰ *Ibid.*, p. 242
- ¹¹ Bicknell, p.256
- ¹² *Ibid.*, p. 257
- ¹³ *Ibid.*
- ¹⁴ Anne Page, *The Willis Organ of Emmanuel United Reformed Church* (Zigzag Music Productions audio CD, 2001.) Liner notes by John Turner, organist, Emmanuel United Reformed Church